

地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)「ひと・まち・しごと」創生を循環させるNIIGATA人材の育成と定着 事業報告 (NIIGATA COC+)

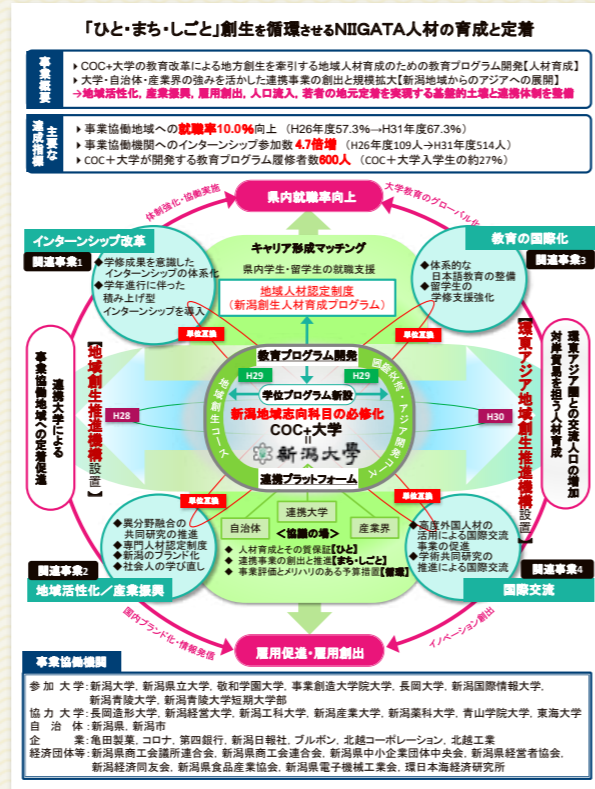
「ひと・まち・しごと」創生を循環させるNIIGATA人材の育成と定着 (NIIGATA COC+)

「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」とは、文部科学省の補助事業で、大学が地方公共団体や企業等と協働して、学生にとって魅力ある就職先を創出し、また、その地域が求める人材を養成することで、地方創生の中心となる「ひと」の地域への定着を推進する事業です。

平成27年度に『ひと・まち・しごと』創生を循環させるNIIGATA人材の育成と定着(NIIGATA COC+)として上記COC+事業に採択されてから5年にわたって、本学は新潟大学を中心とする県内大学、自治体、企業、経済団体等とともに「インターンシップ改革」「地域活性化/産業振興」「教育の国際化」「国際交流」の4つの事業に取り組んできました。これら4つの事業は、県内の就職率向上と国内外からの人口流入を実現することにより、地方創生につながることを目的としたもので、このうち本学は主に次の2つの事業に参画しました。

教育の国際化

「教育の国際化」では、日本語支援室を開設し、日本語教員による、留学生への日本語学習の支援を行いました。これは、日本語学習経験のない大学院留学生や、短期交換留学生の増加により、既存の日本語カリキュラムでは対応が困難な状況にある留学生への新たな日本語学習支援システムの構築を目的に行ったものです。この事業を今後も推し進めていくことで、キャンパスのグローバル化、さらには、留学生の新潟県内企業への就職が促進されることが期待されています。



「ひと・まち・しごと」創生を循環させるNIIGATA人材の育成と定着 (NIIGATA COC+)

国際交流

「国際交流」では、夏季休業中の1週間、本学学生、海外協定校の学生、県内大学の学生が新潟県に集い、特別講義、実地調査、およびグループワークから成るプログラムに参加するサマーセミナーを開催しました。参加学生たちは県内地方都市をモデルに、これらの都市を実際に見学するなどして、地域独自の食文化や産業の魅力などを活かした、まちおこしへの発展の可能性について、各国の特徴や問題点等を踏まえながら考える機会が得られたほか、体験を通じた異文化交流が促進されました。



地域連携センター NEWS

2020 vol.03

Contents

- ごあいさつ・地域との連携 P1
- 学生の活動 P2
- 教員の活動 P3~4
- 公開講座開催報告 P5~6



特集 [1] 学生の活動



特集 [2] 教員の活動

令和元年度地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)シンポジウム開催

令和元年11月19日 ANAクラウンプラザホテル新潟にて、COC+事業のシンポジウムが開催され、これまでの5年間の成果報告等が行われました。その中で本学人間生活学部健康栄養学科3年生の関佳菜さんから、平成30年度にCOC+事業の一環として開催されたイベントで発表した資料をもとに、本学のある新潟市東区の特産品である馬鈴薯を使ったアイデアレシピコンテストについて発表が行われました。



写真左の学生が関佳菜さん



ごあいさつ ～地域連携センターニュースvol.3の発行によせて～

新潟県立大学は、大学の基本理念である「地域性の重視」を追求し、地域社会に開かれた大学として、さまざまな地域連携や産学官連携の総合窓口として地域連携センターを設置しています。地域連携センターの活動は、学生と教職員が一体となって、大学がある新潟市東区をはじめとする市内や県内の方々、NPO、企業、行政等と積極的に交流し、「地域の安心安全を提供するための取組み」「地域社会・経済の活性化や産業の振興、雇用の創出に繋がる取組み」「豊かな人生を送るため生涯にわたって学習できる環境づくり」と多岐にわたると考えております。

また、地域にあるさまざまな思いや願い、課題やニーズを的確に把握して地域社会の発展向上に貢献し、大学と地域が相互につながりあい、協働して取り組み解決していくことを通して、学生が地域から学び、それを広く社会に活かす力が育まれ、本学の教育研究活動のさらなる推進が図られるものと期待しています。

昨年度に続いて、第3号となる「地域連携センターニュースvol.3」を発行する運びとなりました。本号では、令和元年度の本学教員・学生の活動と本センター主催の公開講座の内容を中心にご紹介いたします。ご高覧のほどよろしくお願いいたします。



地域との連携



本学は、地域に根ざした公立大学として、共に地域の課題解決に取り組むべく、新潟市を中心とする県内の自治体、大学等と連携を図っています。

新潟市中央区万代地域コミュニティ協議会との連携 「空き家から考える町の未来にむけたシンポジウムの開催と減災活動」

新潟市の中心にある商業地の最寄りには、万代地区や沼垂地区といった昔ながらの生活風景が残っている市街地があります。人口の減少によって高齢化と少子化が進行している両市街地は、将来的に大量の空き家の発生が予測され、将来的な対策が求められていました。空き家の発生は、犯罪や火災を招き、土地の価値を下落させ、税収の減少による社会サービスの低下を町に呼び込むからです。

こうした地域課題をもつ万代地域コミュニティ協議会は、中央区を介して本学の関谷浩史准教授の研究室に協力を求め、万代エリアの地域分析をもとに、名古屋の中心市街地再生の立役者を招いたシンポジウムを開催し、町の将来に求められる知識や方法を地域住民と共有しました。

さらに、近年頻発している自然災害への避難対策を目的に、地盤の凹凸を感知するセンサーを付帯させた車いすによる路面調査を天明町でおこない、避難時における転倒の可能性や地盤の沈下がみられる場所を特定し、地域のハザード情報としてまとめることで、自主防災につながる取組みモデルを地域に提供いたしました。



- 1 天明会館で実施されたシンポジウム
- 2 地域課題を解決するパネルディスカッション
- 3 路面の凹凸によって転倒の可能性のある場所を特定する道路調査

特集
【1】

学生の活動

本学には、地域の課題解決に積極的に取り組む学生が多くいます。このページでは、親子で正しい食生活を学ぶ料理教室を開催した学生の活動を紹介します。

親子ヘルシーランチクッキング教室を健康栄養学科学生らが主催しました



完成した献立



【栄養価】

エネルギー	622kcal
たんぱく質	24.7g
脂質	25.4g
炭水化物	73.4g
食塩相当量	2.2g

令和元年11月30日、新潟市役所健康対策課と本学健康栄養学科学生8名が共同で、親子ヘルシーランチクッキング教室を新潟市東区プラザで開催しました。子どもの頃の食習慣は将来につながることで、親子で教室に参加し適切な食事についての知識を得てもらうことが目的です。

調理担当は子どもたちで、学生らと『親子で減塩・野菜たっぷりメニュー』として、レタス、きゅうり、トマトがたくさん入った鶏肉と卵のオープンサンド、カボチャスープを作りました。参加したお父さんの中には、調理経験が少ない子も多かったため、包丁の持ち方や野菜の切り方などを教えながら行いましたが、慣れてくると積極的に調理に参加してくれていました。その間に保護者の方には学生による食育の授業を受けていただきました。食塩が高血圧・脳卒中の原因になるため減塩の必要性があること、身近な食品に含まれる食塩の量、香辛料やハーブを使った減塩の工夫などがその内容でした。最後に子どもたちと保護者の方は合流し、楽しく食事をしました。

子どもたちからは「家でまたお母さんと一緒に料理をしたい」「作るのが楽しく美味しかったのでまた来たい」「いつも野菜は生で食べないがパンに挟むと美味しく食べられた」「自分で作ったものはとても美味しく感じた」との感想をいただきました。保護者の方からは、「今回参加して減塩を意識してみようと思った」という方が多く、うれしく感じました。そのほか減塩のための工夫について理解できたなどの感想をいただきました。

参加した学生の声

人間生活学部 健康栄養学科3年
吽野 茉優 Unno mayu

今回考案したレシピは小学生にも作りやすく季節感のあるものを意識したので、教室を通して子どもたちに料理の楽しさが伝わっていたようで嬉しいです。幼少期はこれからの食習慣の形成に大事な時期なので、このような教室を通して「減塩」や「野菜をたくさん摂る」ことを意識してもらいたいと感じました。

本学教員3名のそれぞれの専門分野を活かした地域活動を紹介します。



小池由佳教授の活動紹介

小池教授は年に1回、学生および子ども学科教員2名と一緒に津南町地域子育て支援センターと保育園を訪問しています。日頃、一定数の子ども数がある新潟市で学生たちは保育や子育て支援を学び、教員も研究や地域活動を行っています。新潟県全域を見れば、急激な少子化と人口減少のなかで子どもたちが育ち、子育てが営まれている地域が多数派です。地域特性の違いを理解し、保育者・子育て支援者として求められていることは何かを学び、支える機会として津南町を訪問しています。

教員プロフィール

【所属】人間生活学部 子ども学科
【専門分野】子ども家庭福祉、地域福祉
【担当科目】子ども家庭福祉論、子育て支援論、社会的養護など

津南町地域子育て支援センターへの訪問・支援活動

令和元年7月31日、子ども学科4年生6名と一緒に津南町地域子育て支援センターおよび保育園を訪問しました。まずは、地域子育て支援センターを利用している子どもたちとその保護者と交流。赤ちゃんを抱っこさせてもらったり、一緒に遊んだり、お母さんから話を聞いたりしながら過ごしました。学生たちは実習等を経験しているため、赤ちゃんとのふれあいはお手の物。一方、新潟市と違い町内に1か所しかない地域子育て支援センターならではの特色も感じているようでした。利用者との交流が一区切りしたあと、子どもたちと一緒に遊ぶコーナーを担当。楽しいひとときを過ごしました。

子どもの遊び・関心に寄り添う。つみきはいろんな遊びに展開していきます。



? お母さんじゃないなあ…。子どもからじっと見つめられます。

保育園訪問

地域子育て支援センター訪問終了後は、津南町の子育て支援について説明を聞き、昼食タイム。津南町の美味しい素材を生かしたお弁当を堪能したあと、2つの保育園に分かれて、年長クラスの子どもたちとの交流を行いました。自然がいっぱい、元気いっぱいの子どもたちとのふれあい、そしてその子どもたちをリードする保育士の姿から、元気をもらい、保育士としてのあり方について学ぶことができました。



子どもたちと遊んだ後、親子遊びや絵本の読み聞かせをしました。



少子地域での子育て支援

急速な少子化により子どもが減ってしまった地域でいかに子育てを営むか。社会が経験していないこの状況のなかで、子どもの育ちが守られ、子育てが支えられるために大人や社会がすべきことは何か。どのような保育が展開されることが求められるのか。これからも津南町を訪問しながら、子どもと向き合い、保護者に寄り添う支援者の皆さんと一緒に考えていく活動や機会を大切にしていきたいと思っています。



午後の子どもたちとの関わりに備えて、しっかり食べました!



植木信一教授の活動紹介

植木教授は、平成23年の東日本大震災直後から9年にわたって、人間生活学部子ども学科を中心とした学生とともに、福島県南相馬市の子どもたちを対象とする「子ども支援プログラム」や「学生派遣プログラム」等の活動を続けています。

教員プロフィール

【所属】人間生活学部 子ども学科
【専門分野】社会福祉、児童福祉
【担当科目】社会福祉論、相談援助演習、新潟県の子ども・子育て支援など

子どもの非認知能力を伸ばす被災地の放課後児童クラブ支援事業を実施

子どもの発達のためには、勉強などの認知能力(学力などの数字で測れる能力)だけでなく、子どもの非認知能力(生きる力やコミュニケーション能力などの学力で測れない能力)を伸ばすきっかけづくりが大切です。今回の子ども支援事業では、南相馬市の小学生の非認知能力の醸成に寄与するために、既存の社会資源として被災後も現存する児童センター・放課後児童クラブを活用しました。南相馬市内には、市が直轄する児童センター・放課後児童クラブが12か所あり、継続的な子ども支援による子どもたちの非認知能力の醸成の有効性を検証するために、新潟県立大学が開発した子ども支援プログラムを実施しました。

令和元年度は、第1期(9月)と第2期(3月)にわたって事業を計画しました。教員と大学生で組織される子ども支援スタッフ約30名を派遣し、現地の職員である放課後児童支援員とともに子ども支援事業にあたりました。具体的には、新潟県立大学教員による放課後児童支援員への助言指導と、大学生の派遣による、育成支援、遊び支援、宿題支援などの子ども支援プログラムを実施しました。なお、実施にあたり



大学生による放課後児童クラブでの遊び支援



大学教員による放課後児童支援員への巡回助言

では、南相馬市こども未来部こども家庭課子育て支援係および生活協同組合コープにいがたと連携しました。

今回の事業の実施により、継続的な子ども支援プログラムが、子どもとおとなの間の信頼関係を形成し、さらに信頼関係に基づく適切なかわりによって、子どもたちの非認知能力の醸成が可能であることがわかりました。そもそも南相馬市の児童センター・放課後児童クラブは、地域のさまざまな人たちが集うことのできる子ども支援の拠点であり、「地元のおとなたち」が継続的に子どもたちにかかわる日常こそが子どもたちの非認知能力の醸成につながると考えられます。



大学生による放課後児童クラブでの宿題支援

教員プロフィール

【所属】国際地域学部 国際地域学科
【専門分野】アメリカ文学、環境文学
【担当科目】環境文学・文化演習、言語文化論、アメリカ表象文化論など



小谷一明教授の活動紹介

小谷教授は、環境文学を専門とし、文学において環境がどのように表象されてきたのか、それが実態を映し出しているのに関心を抱き、研究を続けています。2019年の秋に行われた日本平和学会の企画では、環境表象の視点から明治に始まる新潟の150年をたどり、再考するシンポジウムを開催しました。

「培養都市 COLONY」(2015年)の上映会を開催

2019年11月3日、日本平和学会秋季大会の開催校企画として環境と平和に関するシンポジウムを実施し、新発田の写真館館主で世界的に活躍してきた美術家の吉原悠博(ゆきひろ)氏を本学に招聘しました。このシンポジウムの目玉は、吉原氏の映像作品、「培養都市 COLONY」(2015年)の上映でした。作品では、東京のまばゆい夜景を起点とし、そこから何県もの山を越え、川に沿ってはる送電用の鉄塔を追いかける映像が続き、その終着地が新潟でした。このドキュメンタリーは、鉄塔を追いかけることで、新潟で生み出されるエネルギーがどのように利用されているのかを可視化し、中心と周縁というコロナルな関係を浮き彫りにしています。

2019年11月3日、日本平和学会秋季大会の開催校企画として環境と平和に関するシンポジウムを実施し、新発田の写真館館主で世界的に活躍してきた美術家の吉原悠博(ゆきひろ)氏を本学に招聘しました。このシンポジウムの目玉は、吉原氏の映像作品、「培養都市 COLONY」(2015年)の上映でした。作品では、東京のまばゆい夜景を起点とし、そこから何県もの山を越え、川に沿ってはる送電用の鉄塔を追いかける映像が続き、その終着地が新潟でした。このドキュメンタリーは、鉄塔を追いかけることで、新潟で生み出されるエネルギーがどのように利用されているのかを可視化し、中心と周縁というコロナルな関係を浮き彫りにしています。

当日は多くの参加者から映画を称賛する意見が寄せられました。環境と平和というテーマのもとで新潟を見つめ直した映画の上映を行い、これまでとは違う里山風景が見えてくるのではないかと感じています。

新潟は自然豊かなところ、エネルギーに恵



送電用の鉄塔(水原の瓢湖)

「培養都市 COLONY」(2015)冒頭の1シーン



上映後に映画を語る吉原氏

新潟県立大学では、平成21年の開学以来、地域の皆様を対象にした有意義な公開講座を開催してきました。令和元年度は、知的障がい者の卓球世界ランキング上位の美遠さゆりさんと、その母、まゆみさんの講演を中心に、BSN新潟放送の久能木百香さんの事前取材に基づくお話を交えながら、地域や家族の支え合いの大切さなどについて考える講座を開催しました。

地域と家族のチカラで 新潟から世界へ

～東京パラリンピック出場を目指す女性アスリートの軌跡～



(左から)美遠まゆみさん、美遠さゆりさん、久能木百香さん、斎藤裕教授

新潟から東京パラリンピック出場を目指している女性アスリートとそのお母様をお招きして、地域と家族に支えられながら世界で活躍してきたこれまでの軌跡についてお話しいただきました。新潟市在住で知的障がい者卓球の日本ランキング1位、世界ランキング10位(11月1日現在)の美遠さゆりさんと、母親の美遠まゆみさんです。母親のまゆみさんは、知的障がいがありながら卓球に取り組む娘のさゆりさんに寄り添いながら、「卓球を通して成長していく娘の笑顔を見るのが何よりも嬉しい」と母親としての想いを語っていただきました。一方で、知的障がいは見た目ではわかりにくく、知的障がい者卓球での活躍ぶりに対して理解のない人たちもいたといいます。「人を見た目で判断しないでほしい」と繰り返すお話しは、参加者の心に響く内容となりました。

また、報道番組で美遠さん親子を取材されたBSN新潟放送アナウンサーの久能木百香さんも講師にお招きし、アスリート取材する立場から、家族や地域、社会とのかかわりについてお話をいただきました。

後半は、斎藤地域連携センター長を加えたトークセッションが実施されました。美遠さん親子から、卓球との出会いを通じてさまざまな人と関わることで成長できたことや、パラリンピック出場を目指すようになってからはさらに多くの地域の方々を支えられてきたので、今後は、練習を重ね前進する姿を見ていただくことで恩返しできれば嬉しいとの思いを語っていただきました。私たちがさゆりさん親子を応援しているつもりが、さゆりさん親子の経験や成長を目の当たりにした私たちのほうが勇気もらっていることに気がつく公開講座となりました。

なお、本公開講座は、BSN新潟放送、みらい子育てネット・新潟との共催で実施しました。

公開講座レポート

開会あいさつ 斎藤 裕教授 地域連携センター長

私たちは、人生を歩んでいく中で予想もしない困難に出会うことがあると思います。その時に誰とどのようにそれを乗り越えたらよいか、その答えの一つは地域にあるのではないかと考えています。

これから久能木百香さん、美遠まゆみさん、さゆりさんにお話をいただきます。さゆりさんの活躍とそれを支えた地域の方々についてお話しがあると思います。特にこれから社会に出ていく学生の皆さんが困難に立ち向かう際に今日のお話が助けになることを願っています。

講演1 久能木 百香さん

BSN新潟放送メディア本部アナウンス部アナウンサー



取材前には、取材対象者と取材に関係のない話をして、その人と打ち解けた関係になれるように心掛けています。そうすることで、その人本来の人物を知ることができます。美遠さゆりさん取材する中で、何より印象的であったのは、さゆりさんの笑顔で、その笑顔によって周りの人から愛され、コーチ、家族、地域の方々から応援されているのだなと感じました。アナウンサーは男性・女性に関係なく、結婚しても長く働くことができる職業です。そこが魅力で私はこの職業を選びました。また、今回の取材では私がさゆりさんに取材したいという思いから、報道デスクにかけあって実現したもので、このように自分がしたいと思う取材をして、視聴者に伝えることができる職業です。学生のみなさんの中にも、マスコミに興味をもってくださる学生がいたら嬉しいです。

日時 令和元年12月8日(日)
14:00から16:40まで
会場 新潟県立大学 大学院棟1階 4101大講義室
講師 久能木百香さん (BSN新潟放送アナウンサー)
美遠まゆみさん (美遠さゆりさんのお母様)
美遠さゆりさん (卓球<知的障がい>強化指定選手 日本代表)

共催 BSN新潟放送、みらい子育てネット・新潟 後援 新潟県、新潟市、新潟日报社、NHK新潟放送局

公開講座プログラム

14:00	開会・開会あいさつ
14:05~14:35	講演1 久能木 百香さん
14:40~15:10	講演2 美遠 まゆみさん
15:25~15:55	講演3 美遠 さゆりさん
16:05~16:35	登壇者によるトークセッション
16:35	閉会あいさつ
16:40	閉会

講演2 美遠まゆみさん

美遠さゆりさんのお母様



さゆりが特別支援学校の高等部に入学した時、全国障害者スポーツ大会があることを聞いて、さゆりが中学校時代に卓球部に入っていて、家に卓球のラケットがあったことから、それなら頑張ってみようとして卓球教室に通うようになったのが、卓球にのめり込んでいきかけとなりました。2017年の国内でのチャンピオンリーグ大会で優勝したことで日本代表となり、そこから地元の新潟市から助成金をいただいたり、スポーツ用品店から卓球用品を提供して

いただくようになりました。新潟県の障害者スポーツ協会やライオンズクラブからも助成をいただいています。さゆりの兄弟もさゆりの活躍を喜んで応援してくれていますが、体育館で練習中に利用者から「応援しています」と声をかけてもらうのも嬉しいです。こうした応援に昔は恥ずかしくて私の背中に隠れていたさゆりが、今では「頑張ります」と笑顔で答えられるようになったことが、私にとってこれまでの頑張りの何よりのご褒美と思っています。ただ、さゆりの持つ障がいが知的障がいで目に見えない障がいであることから、「何が障がいだ」と心無い言葉を受けることもあります。どうか見た目だけでは判断しないでください。その障がいを理解し、受け入れ、一つでも良いところを伸ばそうという気持ちをもった人が増えれば、きっとスポーツに限らず、もっと力を伸ばせる障がい者が増えるのではないかと思います。知的障がいの子をもつ母親が心穏やかに子育てできる、そして子どもが健やかに育っていきける世の中になったらいいなと思っています。

参加者の声 (アンケートより)

- 障がいを持っている方への声のかけ方や接し方が学べました。
- 自分の強い意志と周りの人の支えがあれば、色々な困難も乗り越えられるのだと思いました。
- 私も今日のお話を聞いてさゆりさんのファンになりました。ぜひ東京パラリンピックという夢を叶えてください！心から応援しています!!

講演3 美遠さゆりさん

卓球<知的障がい>強化指定選手 日本代表



今の世界ランキングのままでは、東京パラリンピックに出場することは難しい状況です。今後できる限り海外の試合に出場し、そこで優勝することで出場権を獲得して、夢を叶えたいと思っています。また、東京パラリンピックの会場のベンチにコーチを座らせることができれば、少しでもコーチへの恩返しになるかなと思っています。今は東京パラリンピックに出場することが夢ですが、その先卓球を続けるか、その次のパラリンピックを目指すかまでは決まっていません。ただ自分を見て知的障がいをはじめ障がいをもっている子どもたちが卓球でなくてもスポーツを始めてくれたら嬉しいと思っています。東京パラリンピックが終わっても何かを与えていける存在になればいいなと思っています。

登壇者によるトークセッション

斎藤 裕教授 地域連携センター長

今、自分の責任は全て自分で引き受ける「自己責任」という言葉がよく使われているけれど、そうではなくて、少しずつみんなが責任や迷惑を引き受け合う、そして支え合う。社会や地域ってというのはそうでなければいけないのではないのでしょうか。困っている人がいれば、もっとみんなが「どうしました」と声をかけたり、あるいは当事者も「手を貸してください」と遠慮なく言ってい世の中になってほしいと思います。そんな思いもあって、今回地域連携センターでは、地域と家族とみんなで力を少しずつ与え合って、前に進んでいこうというテーマを選ばせていただきました。久能木さん、美遠さん、本当に貴重なお話をありがとうございました。